

目標があるからこそ

人生が充実

「中年になってから再開したサッカーで一生青春」

サッカーとの出会い

1968年のメキシコオリンピックで、釜本、杉山の率いるサッカー日本代表が銅メダルを獲得し、日本国内でサッカーという競技が一般に知られるようになりました。私の小学校でもサッカーがブームになり、休み時間になると運動場で、野球ではなくサッカーに明け暮れていました。

私は中学生になるとサッカー部に入部し、初めてキックの仕方、ボールの止め方などサッカーの基礎を教わりました。2つ上の学年が中学校県大会で準優勝したこともあって、私は県大会優勝を目指して練習に励みました。しかしながら、自分達がチームの主力になった3年生の時には、県大会出場を賭けて市大会に臨みましたが大敗し、県大会への出場すら果たせませんでした。サッカーで味わった最初の試練でした。

全国大会へのあこがれ

高校に進学するとサッカーに対する情熱はさらに高まり、入学してすぐにサッカー部の門を叩きました。私達の学年は部員数も多く、サッカーに熱心で、1年半後の高校2年の秋を迎える「全国高校サッカー選手権県大会」に照準を置き、この大会で優勝して「全国大会」に出場することをチームの目標に掲げていました。コーチはいなかったのですが、本から得た情報をもとに自分達で練習を考え、日が暮れてもわずかな明かりを頼りに練習に励みました。

目標にしていた2年生の秋の「全国高校サッカー選手権県大会」。グループリーグで2試合が終わった時点で2連敗してしまい、決勝トーナメント進出の望みが絶たれました。試合後、2年生全員で公園の芝生に車座になり、自分達の試合を振り返り、悔し涙を流し、最終戦では悔いのない試合をし



西川 透

石川県農林水産部農業政策課
中山間地域振興室長

【にしかわ とおる】1959年石川県白山市生まれ。京都大学卒、1982年4月石川県庁入庁。石川県シニアサッカー連盟理事、白山市サッカー協会理事。松任フットボールクラブシニア代表、石川県庁サッカー部総監督を務める。サッカーC級指導員、3級審判員の資格あり。

ようと誓いました。

最終戦はサッカーの強豪校である星稜高校との対戦です。星稜高校と言えば、ACミラン所属で日本代表の本田圭佑など数名のプロ選手を輩出しており、今年1月に開催された全国高校サッカー選手権では準優勝に輝き、その監督の河崎護氏は私達が対戦した当時の星稜高校の主将でした。試合が始まり不利な形勢の中で先制を許し、このまま3連敗で終わってしまうのかというやるせない気持ちになりました。しかし、試合を進めるうちに、カウンター攻撃からシュートまで繋ぎ、相手ゴールキーパーがファンブルしたボールを主将が執念で押し込んで1対1に持ち込みました。その後、一進一退の攻防のまま試合終了のホイッスル。一矢報いたことに主将を囲んで号泣しました。そして、熱い思いを持って挑んだ「全国大会」出場は儂い夢のまま実現することではなく、高校時代が終わりました。



石川40が全国大会「日本スポーツマスターズ」で勝利
(2007年9月：最前列左端が筆者)

再開してハマった 「サッカーの楽しさ」

大学時代は京都で過ごし、大学の同好会チームでサッカーを楽しみ、卒業と同時に、実家を継ぐために郷里に帰って1982年4月に石川県庁に入庁しました。社会人になってからは、仕事と子育てに時間を割くようになり、30代を迎えるまでは、サッカーとは縁がない生活を送っていました。

1991年、石川県で国体が開催された年に、県庁内でもスポーツ振興を図るために当時の知事の命により石川県庁サッカー部が

結成されました。この2年後にはJリーグが開幕し、我が国でも少しずつサッカーが市民権を得てきた時代でした。そのとき私は31歳。サッカー経験があるということでも声がかかりました。飲み会に誘われて行く程度の意識で、2週間に1回、土曜日の午前に行われる練習に参加しました。9年ぶりのサッカーで、練習後はヘトヘトになって午後は家に帰って寝込むといった状態でした。

しかし、サッカー好きな仲間と一緒にボールを追ひ、パスを受け、シュートする。久しぶりに中学、高校、大学の時に没頭していたサッカーの楽しさが蘇り、身体もだんだん慣れてきて、2週間に1回の練習では物足りず、毎週練習を行うよう監

督に進言しました。世間ではJリーグの人氣が高まってきたことも影響して、どんどんサッカーに取り憑かれていきました。

石川県庁サッカー部のあゆみ

設立当初は、サッカー経験のある県庁職員のほか、サッカー経験はないけれども何しろ運動がしたいという職員を集め、15人ぐらいからの弱小チームでした。半数が初心者を集まりの弱小チームでした。

活動のモチベーションを高めるため、1992年に地元金沢で開催されることになった全国自治体職員サッカー選手権北信越大会(以下「自治体北信越大会」という)に出場することにしました。初参加の時は2回戦で敗退し、これ以降も毎年、自治体北信越大会に出場しましたが、5年間は1回戦では勝っても2回戦を突破することはできませんでした。

この大会への参加をきっかけに、石川県庁サッカー部の活動目標を「自治体北信越大会優勝、全国大会出場」としました。高校時代から強く夢見ていた「全国大会」出場という悲願。果たせないまま10年以上、心の中で不完全燃焼のままくすぶっていました。30歳を超えて悲願の残り火が激しく燃え上がってきました。

1997年の37歳の時に、年齢的にも選手としては限界を感じていたので、選手を引退し、チームの監督を引き継ぐことにしました。選手としてチームを引っ張るよりも、監



全国大会「日本スポーツマスターズ」でプレーする筆者(2007年9月)

督として選手の能力を引き出し、チームを強化した方が「全国大会」への近道だと判断しました。メンバーの補強と練習の成果が徐々に現れ、1997年、1998年には自治体北信越大会でベスト4、そして監督就任3年目の1999年には念願の北信越制覇を成し遂げ、生まれて初めて「全国大会」の切符を手にすることができました。このとき私は39歳になっていました。

1999年7月に、夢にまで見ていた「全国大会」が北海道札幌市で開催されました。開会式の入場行進の時に会場アナウンスでチーム紹介された時は武者震いがしました。これが10代の頃から夢見ていた「全国大会」の舞台なのだと思わずに感無量でした。初戦で強豪静岡県の清水市役所と対戦し、前半は1対0とリードしたものの、後半に逆転され、初戦突破はなりません。その後、チーム力も安定して、2001年から連続して自治体北信越大会で優勝し、2001年の沖縄県那覇大会、2002年の茨城県日立大会、2003年の北海道帯広大会と3年連続「全国大会」出場を果たしました。



石川50でプレーする筆者
(2012年11月)

活動の舞台をシニアサッカー界へ

私は、若い頃からの目標であった「全国大会」出場を監督として果たすことができた。長年の念願を叶えることができたので、大きな達成感はありませんでしたが、それと引き換えに選手の指導のために自分でプレーすることを我慢しなければなりませんでした。

2002年、サッカーのワールドカップが日本で開催された年です。私は42歳で、石川県庁サッカー部の監督に就任して6年目になっていました。この年、3回目の「全国大会」出場を果たし、監督として一定の成果を上げることができたので、今度は再び選手として自らサッカーのプレーを楽しみたいと思うようになりました。

そこで、石川県庁サッカー部の監督を務めながら、県シニアリーグにプレーヤーとして参加することを決意し、私の地元にある

シニアチームの松任フットボールクラブシニア（以下「松任シニア」という）に入会しました。同世代の選手だけで試合をするので、それまでの若い選手達を相手にプレーしていた時に比べて余裕を持ってプレーができ、思うようにサッカーを楽しむことができました。また、久しぶりに公式戦でプレーできることを心から喜び、試合でゴールを決める快感に久しぶりに浸ることができました。

県シニア選抜チームで 掴み取った全国切符

松任シニアの選手としてシニアリーグに参加して3年目の2004年、私が44歳の時に、シニアリーグでの活躍が評価され、40歳以上の石川県選抜チーム（以下「石川40」という）からオファーが来しました。石川40は、「日本スポーツマスターズ大会」出場を目指すための県選抜チームで、この大会は40歳以上の選手で順位を競うガチンコ対決の「全国大会」です。シニアサッカーは勝敗よりもどちらかと言えばレクレーション志向ですが、勝利第一主義の石川40でプレーできることに私は強い魅力を感じました。

「全国大会」に出場するためには、北信越（石川県、富山県、福井県、新潟県、長野県）大会で優勝しなければなりません。私が石川40に加入して3年間は、北信越の壁を越えられずにいたのですが、2007年について北信越大会を勝ち抜き、念願の「日本スポーツマスターズ大会」の出場を決めました。



石川50全国大会出場
(2013年11月：前列左から3人目が筆者)

選手として初めて「全国大会」の切符を手にした時、私は47歳で、石川40の中では最年長の選手になっていました。15歳から夢見てきた「全国大会」でプレーすることが、32年の歳月を経てやっと実現できました。

初めて選手として参加する「全国大会」は、滋賀県守山市で開催されました。1次リーグは宮城代表、神奈川代表、宮崎代表、石川40の4チームが総当たりで戦い、1位のみが決勝トーナメント（ベスト4）に進むことができます。石川40は宮城代表に0対1、神奈川代表に2対3と2連敗してしまいました。1次リーグの最終戦となった宮崎代表との対戦では、ペナルティキックで先制されたものの、その後2ゴールを決め、逆転勝利をおさめました。決勝トーナメントには進みませんでした。私達の石川40があげた勝利は、石川県シニアサッカー史上、「全国大会」初勝利であり、新たな一歩を刻みました。



上) 全国大会の試合の合間に観光
(2013年11月：後列右から4人目が筆者)



下) 全国大会での交流会も楽しみのひとつ
(2013年11月：前列右から2人目が筆者)

私は50歳になると同時に、「全国シニアサッカー大会（50歳以上）」を目指す50歳以上の石川県選抜チーム（以下「石川50」という）に呼ばれました。石川50に入ってから、50歳、51歳では北信越大会の壁を越えられませんでした。52歳の時に石川50は北信越大会を勝ち抜き、2012年の大阪府堺市で開催された「全国大会」に出場を果たしました。カテゴリーは変わったけれども、5年ぶりの「全国大会」です。

1次リーグで初戦は山形代表を1対0で破り、第2戦は広島代表に0対1で敗れ、第3戦は愛媛代表と0対0の引き分けで、石川50はグループ2位となりました。同グループの1位は3戦全勝の広島代表で、決勝トーナメントに進んでも勝ち上がり、優勝しました。石川50は、「全国大会」で優勝チームの広島代表以外には負けず、優勝チームにも惜敗という成績を残し、帰路のバスの中では心地良い疲れとともに満足感に浸っていました。

サッカーを通じて人生を豊かに

私の座右の銘は「一生燃焼、一生感動、一生青春」です。いくつになっても何事に対しても全力で取り組み、いくつになっても感動する気持ちを失わない。そうすれば一生青春でいられると信じています。これは私が「全国大会」という目標を掲げて取り組んできたサッカーから学んだ人生です。

10代では「全国大会」に出場することを夢見ましたが叶わず、20代ではサッカーを離れ、30代になってサッカーに再び巡り会いました。そしてサッカーに没頭するようになり、監督という立場でしたが、初めて「全国大会」に出場できました。40代になって、今度はシニアサッカーの選手として「全国大会」に出場でき、50代でも「全国大会」への出場が叶いました。いくつになっても胸にはいつも「全国大会」という目標があるからこそ、充実したサッカー人生を送ることができることができました。

そして、人生の充実にはサッカーの枠に留まっていません。現在、水曜の夜の体育館での練習、土曜は午前のグラウンドでの練習、そして日曜は試合という週3回のサッカーとそれ以外に週2回のジム通いを行っています。目標を持ってトレーニングを続けることは、フィジカル面の老化を遅らせ、仕事のストレスも解消できるといったメンタルヘルス面の効果も大きく、心身両面で健康維持につながっています。

また、新たな仲間との出会いがあります。

シニアサッカーでは職場の域を超えたメンバーでチームを構成しているのが、様々な職種の人との交流ができ、刺激や再発見をもたらしています。北信越大会や全国大会の際の遠征では、試合の合間に仲間達とともにその地方の観光をしながら、食、風土、人情などに触れることができ、これも楽しみの一つです。このようにサッカーは私の人生を豊かにしてくれています。

おわりに

2014年7月に全国自治体職員サッカー選手権が石川県で開催されます。我が国で初めて「世界農業遺産」に認定された能登半島にある七尾市が「全国大会」の会場となり、全国から各地区大会を勝ち抜いた自治体チームをお迎えします。私の人生を充実させてきた「全国大会」に、今度は運営という形で携わることができます。石川県には「能登はやさしや土までも」という諺がありますが、全国から来県される皆様に満足していただけるように、能登ならではの人情味のある「おもてなし」を心掛け、参加した皆様が記憶に残る大会になるよう努めていきたいと思えます。

最後に、31歳で再びサッカーに目覚め、20年以上も私のサッカー三昧の生活に理解を示してくれている家族に感謝し、この寄稿にかえさせていただきます。